

終戦 80 年記念—出征する若者へ—

本年は昭和改元から100年、第二次世界大戦が終結してから80年の記念の年に当たります。昭和時代前半の日本では満州事変から始まり、日中戦争、アジア・太平洋戦争と大きな戦争が立て続けに勃発します。これにより多くの若者が兵士として戦地へ向かうことになったのです。

当時、兵隊として出征することは名誉なこととされていました。出征する若者を送るのは、肉親や友人、近隣の住民でした。若者を激励して送り出すために出征幟を用いし、また戦地での無事を祈念した物品を渡したのです。

この度の展覧会では、出征にあたり様々な願いが込められた資料を紹介します。出征した若者たちに想いを馳せ、恒久な平和を祈念しご覧ください。



松江駅から汽車で出征する若者
昭和19年(1944)3月



大勢の激励が書かれた日章旗

松江市末次本町(京店)の岡崎英雄氏が出征に際して知人から贈られた日章旗である。岡崎氏は昭和7年(1932)に徴兵され、除隊後の同13年(1938)に再び召集されて歩兵第163連隊に入り中国へ渡った。日章旗の右上には須衛都久神社の朱印が押され、地元である「京店防護団」や「出雲揖屋橋本楼」などの寄書が白布を埋め尽くす。

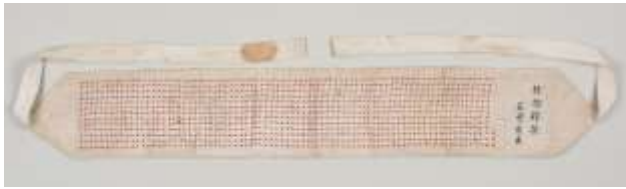
日章旗寄書
昭和7年(1932)か昭和13年(1938)



弾丸除けのお守り 千人針

千人針は、出征する兵士に女性が贈った弾丸除けのお守りである。木綿の布に千人の女性たちが赤い糸で一針ずつ玉留を縫って作ったもの。二点とも日章旗寄書と同じ岡崎英雄氏に贈られたもので、頭を守る鉄兜の下に装着する頭巾と「東洋平和之道 皇軍在双肩」と記した布である。

千人針を施した頭巾と布
昭和13年(1938)ごろ



まじないの言葉を記した腹巻

松江市北堀町から出征した石原房吉に贈られた千人針の腹巻である。表には赤い玉留が並び「サムハラ」というまじないの言葉と「石原房吉」と記し、裏には「武運長久」と記す。石原家では長兄の英次氏ら4兄弟が出征し、皆無事に帰還している。

腹巻

昭和 10 年代



松江大橋北詰で千人針を縫う女性

昭和 10 年代



雑賀町での出征兵士の歓送会

昭和 13 年(1938)



予科練の制服を着て大社に参詣

昭和 19 年(1944)



出征を祝って掲げた大 幟

松江市北堀町の石原英次氏は、昭和 11 年（1936）に松江の歩兵第 63 連隊へ入営する。これを祝い、近隣や縁者などから贈られた出征幟で、本資料は近所の「本大蘆」家から贈られたもの。その時の様子が写真で残り、大小 14 本の幟が堀川沿いに立ち並ぶ。石原氏は中国に渡り、昭和 12 年（1937）に負傷し帰国した。

出征幟

昭和 11 年（1936）



サメに喰われないための腹巻

松江市八雲町出身の三島岩市氏は、昭和 20 年（1945）に 17 歳で浜田の連隊（歩兵第 21 連隊か）へ徴兵されるも内地で終戦を迎えた。この腹巻は、弾丸や破片が貫通しにくい真綿で作られ、海に投げ出された際に備えサメが嫌うとされた赤い布を縫い付けている。戦地での無事を祈り、若い兵士に贈ったのであろう。

腹巻

昭和 20 年（1945）